★「好評記事のプレゼント」企画　3・4・9・10面　The SEIKYO GIFT　セイキョウ　ギフト

CROSS POINT クロスポイント Vol.3

創価学会の青年世代のリーダーと各界のオピニオンリーダーが語り合う電子版連載「CROSS POINT」。第3回は、評論家の與那覇潤さんと創価学会青年部長の西方光雄さんが登場。「宗教者の政治参加」をテーマに意見を交わしました。

（聖教電子版8月26日配信、創価新報9月号掲載）

テーマ　宗教者の政治参加

評論家
與那覇 潤

よなは・じゅん　1979年、神奈川県生まれ。東京大学大学院博士課程修了。公立大学准教授として日本近代史を教えた後、2017年に病気離職し、評論家に。『中国化する日本』『知性は死なない』（文春文庫）、『平成史』（文藝春秋）など著書多数。

創価学会青年部長
西方 光雄

にしかた・みつお　1984年、大阪府生まれ。創価大学卒。創価学会の学生部長、男子部長等を歴任。SGIユース共同代表として、本年3月に開催された「未来アクションフェス」では、実行委員会の一員として携わった。

〝お祭り〟すら個人化する社会

西方　7月7日に実施された東京都知事選挙では、SNSやAIなどを駆使した青年世代の候補たちが、これまで政治に無関心だった若者・無党派層に支持を広げ、話題を呼びました。今回の都知事選をどのように捉えておられますか？

與那覇　「既成政党離れ」を指摘するメディアもありましたが、それはだいぶ前からの動向ですよね。むしろ私が今回強く感じたのは、〝政党という概念〟離れです。

もともと無党派層には、既成政党に違和感を抱く人が多く、平成期の新党ブームをもたらした。しかし今では、「そもそも政党って必要ですか？」という感覚を、若者を中心に多くの人が持っているのではないでしょうか。

高度経済成長期を経た日本は成熟社会を迎え、地縁や血縁といったつながりが薄れ、「個人化」が進みました。他人との関わりは煩わしいものとされ、自分が思うままに生きることを推奨されるようになった。その結果、今や、特定のコミュニティーに属することなく、一人で生きるライフスタイルが定着し、集団でアクションを起こすという発想が生まれづらくなっています。

動画をバラバラにスマホで見て盛り上がり、個々人で拡散する。リアルな演説会も各自のSNSにアップするのが目的だから、短く終わって仲間意識もなく解散。「選挙はお祭り」とよく言われますが、もはやその〝お祭り〟すら個人化しきった光景は衝撃でした。

西方　こうした意識の変化は政治の世界に限ったことではないと思います。例えば、無宗教を自認する友人や知人と対話するなかで、宗教そのものに対する抵抗感よりも、「一つの集団に属する」ことへの抵抗感を強く持っている人が多いのではないかと感じています。

與那覇　同感です。より身近な例でいえば、職場での「飲み会離れ」とも相似形かもしれません。

精神科医の大平健さんは、1995年に出版した『やさしさの精神病理』（岩波新書）の中で、「やさしさ」という言葉の意味合いの変化に着目し、社会の個人化が人々の感覚自体を大きく変えたことを論じています。

学生運動が盛んだった1970年の前後は、他人が抱える傷や苦しみを想像し、他者に積極的に関わろうとする気持ちが「やさしさ」と呼ばれました。それが90年代には、「相手は相手」「自分は自分」として、他人の内面にはむしろ踏み込まないのが「やさしさ」の定義になった。

この「相手と自分」の線引きは、その後エスカレートし、SNSが定着した平成の末期には「相手に気を遣わずに、言いたいことだけを一方的に言えばいい」とする雰囲気が生まれました。著名人も含めて、バラバラの個人どうしがののしり合い、「嫌ならブロックすればいいだろう」と居直る例は後を絶ちません。今回の都知事選でも、そうしたやり取りが目立ちました。

西方　「人は自由に生きた方が良い」という行きすぎた個人化は、もはや限界にきているといえる。むしろ、面倒くさい部分もありますが、顔を突き合わせて一緒に考えた方が、考えが極端にならず、お互いの意見がモデレート（穏健化）され、対立や分断も減っていく。

私たち創価学会の活動は、ある意味でその〝面倒くさい〟ことに積極的に関わっていくことだともいえます。

人と人との積極的な関わりの中だからこそ、さまざまな学びや成長も得られる。学会員の多くは、そうした面倒くささの重要性を体感としてつかんでいると思います。

與那覇　宗教は定義の上からも、人間の内面に働きかける営みだから、面倒くさい関わりを手放せない。昔は地域や職場の共同体も同様だったのですが、それらが「個人のチョイス」次第になった結果、〝面倒くささ〟の担い手として以前より宗教が突出している。

先日、社会学者の開沼博さんが解説を担当した書籍『「外部」と見た創価学会の現場』（潮出版社）を拝読しました。一番胸打たれたのは、水俣での活動を描いた「『苦海』の不条理を越えて」の章です。

1950年代、工場の「有機水銀汚染物質」が原因で発生した「水俣病」によって、地域社会は分断され、対立が深まりました。

4面に続く

熊本・水俣湾の夕日

ご感想をお寄せください。
メール　youth@seikyo-np.jp　ファクス　03-5360-9470